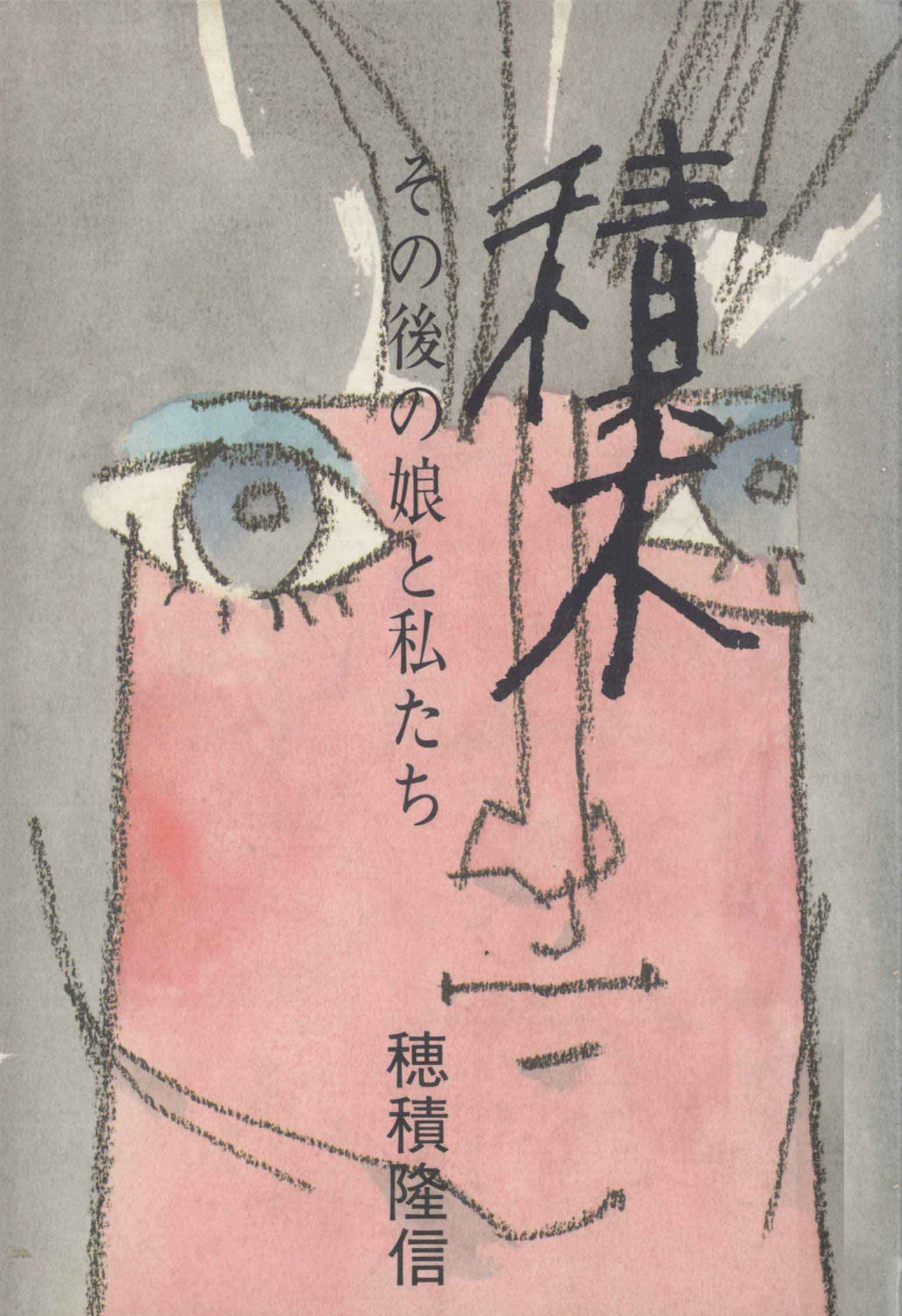




その後の娘と私たち

穂積隆信

穂積隆信

積木

— その後の娘と私たち



積 木——その後の娘と私たち

定価九八〇円

穂 積 隆 信（はづみ たかのぶ）

本名 鈴木隆信 昭和六年七月二十日、
静岡県伊豆に生まれる。

父穂積忠は静岡県立女子南校の校長を務め
た教育者であり、折口信夫、北原白秋門下
の歌人、国文学者であった。

昭和二十八年俳優座養成所を卒業。新人会、
新劇場を経て、現在舞台、テレビ、ラジオ
などで活躍している。

昭和五十九年十一月一日 初版発行
昭和五十九年十一月三十日 第六刷

著 者 穂 積 隆 信

発 行 者 刈 澤 秀 夫

発 行 所 東 京 出 版 株 式 会 社

東京都千代田区神田神保町2-13

小林ビル5階

郵便番号一〇一

電話 東京〇三一二六三―三四一〇

印刷 誠隆印刷株式会社

乱丁・落丁本はご面倒ですが小社宛ご送付ください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

© Takanobu Hozumi, 1984, Printed in Japan.

ISBN4-924644-08-0

もくじ

積木——その後の娘と私たち

第一章 長いしじまのなかで

不吉な呼出し

7

神様はいたか

16

激流に乗った筏

21

心と行為

28

いらだちと後悔の狭間

33

第二章 家族という名の船

意外な伝言

39

昔の家・いまの家

47

船が沈まんとするときに

51

原点からの愛

63

第三章 身は離れていようとも

風景のなかの由香里

73

断ち切られた望み

78

引き合う糸

84

「平和」と「穏やか」と

94

第四章 わかり合える心

初めての手紙

105

由香里の笑顔

109

恥ずかしさを知る

122

生きる勇気と縋る思い

129

自らを問う心

136

第五章 愛することと生きること

深夜の訪問者

145

追いつめられて

154

親と子の出発点

160

第六章 やさしさの向うにみえるもの

ふところの「お守り」

171

由香里、許してくれ

178

かみしめる幸せ

184

新しい出発

191

平凡さのなかに

198

あとがき

204

第一章 長いしじまのなかで



いつまでも存続するものは、

信仰と希望と愛と、この三つである。

このうちで最も大いなるものは、

愛である。

(聖書「コリント人への第一の手紙」)

不吉な呼出し

机の上の電話がけたたましく鳴った。

妻が受話器を手にしたとき、私は一瞬、不快な気分が走った。それは、電話で仕事が中断されたからというよりも、私と妻に、涙を浮かべて子供のことで話されている相談者に対して、失礼のような気がしたからである。

「後にしてもらいなさい」

私は妻に言った。

受話器を持った妻は、「はい」と言いながらも相手の話に聞き入っていた。その様子から察すると、相手はどうも自宅にいる私のおふくろのようであった。妻は、「はい」「はい」と答えていて、なかなか電話を切ろうとしない。その妻の顔色がしだいに変わっていくのが、私にはわか

った。何かあったな、と私は思った。

その瞬間、私の脳裏に由香里の顔がよぎった。

この日、私たちは、ある雑誌の依頼で、子供のことで悩むお父様とお母様に、私たちが開いた「相談室」でお会いしていた。妻は、お客様の手前、話の内容を知られないように懸命に努めていた。電話を切った妻は、

「急用ができましたので、ちょっと失礼します。話の途中で中座してごめんなさい」

と、相談者に詫び、私に「あとで」と短く言うと言席を立てていった。

私は、妻の後を追って何があったのか聞きたい衝動に駆られたが、かろうじて自分を抑えた。そのとき私は、何気なく時計をみた。昭和五十八年十月十八日。時計は午後の七時を指していた。

私の不安は、時計の針が進むにつれて増していった。

娘由香里がよく警察に補導されていたころ、私たちは電話に怯えていた。娘が二、三日家に帰らない日が続くと、きまって警察から電話がかかってきたのである。その電話を受けると、妻は「私が行きます」と言って、私に質問も許さない厳しきで家を飛び出していった。そんな当時の雰囲気、きょうの妻には感じられた。

私は妻の後ろ姿に、いまでは遠くなったそのことを思い出していた。由香里に何かあったにちがいない。私は確信した。そう思い込むと、相談者との話もうわの空になってきた。だが、雑誌の記者も同席している。私は、そのことを知られたら大変だと思い、必死で何気ない顔をよそおって取材を続けた。腋の下から胸にかけて冷たい汗が流れた。

さいわい、相談者も記者も、私の態度から異変を感じないようであった。人様の子供の悩みを聞きながら、自分の心はそれ以上につらい状態にあるのが、哀れとも滑稽ともつかぬ妙なもののような気がして、おかしかった。

しばらくすると、また電話が鳴った。私は悠悠として、心は飛ぶようにして受話器を手にした。妻からの電話であった。

「あなた、私の話だけを聞いてちょうだい。答えるだけでいいのよ。落ち着くのよ」
そう言う妻の声は震えていた。

「あなた、由香里が新宿署に補導されました。警察からの電話が、おばあちゃんのところへあったんです。私はこれから新宿署へ行つて来ます。あなたは仕事を続けてください」

それだけ言うと、妻は電話を切ってしまった。

私は混乱した。仕事どころではなかった。すぐ事情を話して、その場でやめたかった。しかし、

理性がかりうじて私を支えた。

どうにか仕事を終えた私は、相談者と記者を玄関から送り出したとたん、座り込んでしまった。

私は、いま自分がやれることをあれこれ考えてみたが、いずれにせよ、警察から戻ってくる妻を待つ以外、どうにもならないことを確認したにすぎなかった。

冷静さを取り戻した私は、娘がどうして警察に補導されるようなことになったのか、いろいろ考えてみた。そして、最近の娘の生活に考えをめぐらしたとき、私は、はたとシンナーだと思った。それ以外に思い当たることはなかった。

私が『積木くずし』を書いてからの一年というものの、私と妻と娘のあいだではシンナーが行ったり来たりした。あるときは、娘がシンナーを本当に克服したかと思うと、またシンナーにとらわれていたりした。それにつれて私と妻は抱き合うほどの喜びを感じたり、また深い絶望感に陥ったりした。シンナーは、私たちの生活のなかで、悪魔のように振る舞っていたのである。

私は、娘がシンナーを吸っているとき、決して怒鳴ったり殴ったりはしなかった。シンナーを取りあげては、シンナーを吸うことが、いかに体に害のあることか、法律にも触れることかを説いていた。

そんな私たちの心が娘に通じたのであろうか、娘もしだいにシンナーと戦い始め、あるときなどは涙を流しながら、シンナーに手を出す自分を詫げるまでになっていた。

以前、由香里は、シンナーを取りあげると、狂ったように暴れた。私はそれを知っているの
で、私の前で涙を流しながら詫げる娘の姿をみると、そのあまりの変化に言葉がなかった。

それに私は、『積木くずし』を書いたことから、娘のうえに眼にみえない網のように、幾重にも覆いかぶさる精神的な圧迫を感じないではいられなかった。

街を歩けば「『積木くずし』の由香里」と言われた娘。また、朝から夜まで由香里あてにかかってくる子供たちの電話。その電話の多くは、善意にあふれたものであったにせよ、娘にはつらいことが何度もあったようである。あるときなどは石を投げつけられ、腕に大きな痣をつくって帰って来たこともあった。そうした当時のことを妻はこんなふうに記している。

妻の日記

昭和五十八年一月十五日

由香里の腕に大きな痣をみつけた。驚いて、

「由香ちゃん、どうしたの、その腕」

と聞いても由香里は何も言わない。

「どこへ行ってたの？」

と聞くと、

「新宿」

とポツリと言う。

「それで、何があったの？」と聞いても、押し黙っているばかりで何も言わない。

由香里には、つらい思いがいっぱいたまっているのではないだろうか。その思いを打ち明けてくれさえすれば、共に背負っていくのに……。

由香里に、

「ユウちゃん、お母さんポリバケツ持ってくるから、それにユウちゃんの中に溜まっているもの、全部吐き出してごらん」と言って、ポリバケツを置いてみた。すると、

「お母さん、ポリバケツひとつじゃすまないよ」

と言う。そして、

「そんなものフタしちゃっていいわよ」と。

「じゃあ、しょうがない。きょうはとりあえずフタをするか」と、おどけてみせると、由香里はこの日のことをポツリポツリと話してくれた。

「お母さん、きょうね、私、新宿で石をぶつけられたの。でも、心配しないでいいわよ。由香里、大丈夫だから……。私ね、お母さん、私がいま思っていること……。お父さんが『積木くずし』を書いて有名になったこと……。そんなこと、お父さんに言ってみてもどうにもならないでしょ。あれ書いていちばん苦しんでいるの、お父さんよね。私、それ知ってるから、お父さんには何も言えないの……」

私は由香里の前で涙が出そうになるのを抑えた。ただ、「由香、由香」と呼んで由香里を抱いただけだった。いま、そのことを思い出すと、涙が出てきて、どうしようもない。

一月二十日

「ただいま……」という声が、いつもの由香里の調子ではなかった。だるそうなその声は、やっとわが家にたどり着いたことを教えていた。何かあったなと思った。

由香里はお勝手に入ってくるなり、ドスンと尻もちをつき、ダラリと腕を投げ出して、首を折った。そのとき、なぜか両手だけがしっかりと握られているのに気づいた。私は、もしや、と思い、由香里の傍へ駆け寄った。

「由香ちゃん、どうしたの？」

由香里は呼びかけに何の反応も示さない。

「ユウちゃん、手を開いてごらん」

そう言うのと由香里は、

「いやだ……」と力なく答えた。

「そう……。じゃあ、お母さん、開いてあげる」

私は由香里の手を取り、指を一本一本、引きはがした。その